

追悼 渡辺博史先生

## お別れの言葉

社会学部長 藤枝征司

渡辺先生

ここに社会学部を代表して先生へのお別れの言葉を述べさせていただきます。先生との公私とものお付き合いは、社会学部開設以来のもので、先生のご生涯のいわば最後の13年間に当たります。

渡辺先生は、社会学部開設準備の段階から新学部創設のために、当時の佐伯学長（現学園長）共々、ご尽力され、さらには設立時には青井初代学部長の学科主任として補佐役に徹し、青井先生引退後第2代学部長に就任し、学部の独り立ちに力を尽くされました。

先生は学部創立5年目の1992年（平成4年）4月から1998年（平成10年）3月まで3期6年間に亘って学部長として学部運営の重責を担って来られました。その在任中は、今日の社会学部の骨格を成すところの大学院修士課程、博士過程を開設し、さらには1993年（平成5年）国際観光学科開設を成し遂げる最も重要な時期に学部長としてその職務の遂行に力を尽くされましたことなど、私どもは深く記憶にとどめるところであります。

想起いたしますと、1994年（平成6年）5月、丁度学部長職の2期目に就かれた直後のこの時に奥様の陽子夫人が事故で亡くられるという悲しい出来事がありました。この時、私は大学から特別研究期間制度により6ヶ月間の長期の研究休暇を賜り、フィレンツェに滞在中であり、事故後数日経ってその出来事を妻から知らされ、先生のご胸中の悲しみを想い涙したものでした。しかしながら、先生は愛妻の陽子夫人を失くされるというこのむごい現実には打ち克って、その後も引き続き社会学部長職に専念され、社会学部の牽引車となり鋭意その運営に全力をそそがれたのであります。

先生は、また、学外においては永年教育社会学会の幹事を務められるなど学会をリードする指導的な役割を果たされる一方で、多くの地域での社会教育の啓蒙的活動の先駆者としての役割をも果たされたご功績については万人の認めるところであり、先生にはそうした地域で地道に草の根的な啓蒙活動に従事されている女性たちの間に熱狂的な先生への信奉者が数多くおられたこともまた、先生のご功績を考える時、決して忘れてはならない真実の一つであります。先生がある時、話している席で「学部長になってからは、依頼される講演についても校務を優先しているので極力お断りしています」とやや

寂しげに語られるのをお聞きしたことがあります。先生の社会教育に捧げられた何ものにも代え難いその情熱は、先生のご生涯を貫かれた社会教育ひいては農村の青年教育への確固たる信念に支えられたものであったのでしょう。そうした社会教育、生涯教育への先生のご貢献に対して政府は1996年（平成8年）秋に、総理府総務庁長官賞をもって報いてくれました。千葉県の東葛地区の社会教育関係者が主催して行なわれましたその受賞記念のパーティーの末席に連なり、私の先生へのお祝いの気持ちを表させていただいた時などは、先生が破顔一笑、満面に喜びの表情を浮かべながら心から喜ばれていた場面が走馬灯の如く想い起こされます。

今から3年前の1998年（平成10年）の2月に脳梗塞という病を發せられて以来、先生は病いと誠実に対話し、病いと折り合いをつけながら日々の行動の中でその克服に務めてこられました。先生は1年後、見事に大学に復歸されました。私たち社会学部の教員も先生のお元気な姿に接し、心強く思ったものでした。

個人的なことをお話しするのをお赦しいただきます。先生のご生涯の最後の13年余りにわたる最重要な時期に先生とのご交誼を結ばせていただいた一人として先生に公私にわたる教えを賜り、兄事できましたことは、私の喜びとするところであります。

先生の思い出はこの場で語り尽くせるものではありませんが、終わりに一言申し述べてこの責を果たさせていただくことに致します。

社会学部の礎を築いた最大の功労者のお一人である先生に心より深く御礼申し上げます。先生の温顔に秘められた人間愛への確固たる信頼の思いと学問を天職とする人々が共有する物事への厳しい観察眼と対処の姿勢から私たちは多くのことを学ばせていただきました。そうした先生の「無言の教え」を糧として、社会学部を一層発展させるために、日々の営為を怠ることなく努力を重ねて参る所存であります。

奥様のもとに旅立たれた今、私どもは先生が安らかに眠られますことをお祈り申し上げます、「お別れの言葉」といたします。

渡辺先生、さようなら。

付記：本稿は2001年6月28日に催された「お別れの会」の席で、ご霊前に捧げられた「お別れの言葉」を、一部字句等の追加・訂正のうえ再録したものであることをお断り致します。